エノト・オンライン

ガナンガナン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エノト・オンライン

【Ｎコード】
Ｎ７２０８Ｗ

【作者名】
ガナンガナン

【あらすじ】
オンラインゲームをした事が無い、哲を引きずり込んだ翔。二人は偶然当てた隠しコンテンツをプレイするが、そこは千年前だった。二人は目的も無く歩き出す。うろうろＲＰＧが始まる。

隠しコンテンツ

エノト・オンライン。
サービス開始時をベルド暦１００年とし、一ヶ月ごとに一年が過ぎる、リアルタイムＶＲＭＭＯＲＰＧである。
キャラクターは歳をとり、フィールドはその姿を変えていき、一度起きたイベントは、そのキャラクターが寿命で死ぬと二度と起きない。その代わり、別のキャラクターが違うイベントで同じ報酬を渡したり、子孫が同じイベントを担当したりと、一期一会をテーマにしており、ストーリー上重要だったキャラクター達の、その後に感動するプレイヤーも数多く居た。
そんな、仮想的な命の移り変わりの中。一人の中堅プレイヤーが、友人をこのゲームに引っ張り込んだ所で物語りは始まる。

「おい翔、何か当たったみたいなんだが……」
多くの星が輝く宇宙に翔は居た。設定では、プレイヤーは宇宙で生まれ、ここから星、エノトへと降り立つ事になる。単純に言えばただのキャラクター選択画面である。
翔は体感型ゲームであるＶＲどころか、絶滅しかけのＭＭＯＲＰＧすらやった事のない友人、哲に、ゲームを始めるための登録を教えていた。すると哲が言い出したのだ。
「何が当たった？」
「読むぞ？　あなたは隠しコンテンツ、真理に潜む者への参加権を得ました。よろしければご参加下さい……だと」
ゲームの公式サイトでの告知では、当てはまる様なイベントは無い。運営会社のドッキリイベントだろうか？　セキュリティは、ゲームと言うには度が過ぎているほど強固で、毎月何人ものクラッカーが警察に捕まっている。そんなニュースを翔は知って居たもの

だから、イベント好きな運営像とあいまって、哲に「多分、運営のイベントだからやってみたら？」と軽い返事を返した。
「プレイヤー登録ＩＤを追加すると、その人も出来るっぽいぞ。どうする？」
翔は哲の言葉に興味をひかれた。クリアすればネット仲間に自慢出来る、そんな気持ちも徐々に強まり、哲にＩＤを登録してもらうと、眼下にある惑星エノトを見つめていた。

自身の呼吸で目が覚めた。
目の前は、青いと言うより明るい水色で。悪夢でも見たかの様に汗をかいていた。
上体を起こすと短めの草原が広がっている。
翔は何がなんだか分からず、のろのろと立ち上がろうとすると、視界に盛り上がった服が見えた。ぼうっとする頭でそれに触る。
胸に強い刺激が走った。
「え？」
立ち上がって体を見下ろす、まずストッキングに包まれた長い足が見えた。次にフリルの付いたミニスカート、肩から露出したブラウス。翔は理解した。女になっている。しかし、ＶＲをするために必要なヘルメットで性別変更は出来ない。脳のデータをネット回線を通じて処理会社に送っているので、ＶＲシステム上、既存の機器では不可能だった。もちろん、翔が使っているのは既存の機器だ。哲とプレイしようとした時に被ったのも。
はっとした。哲はどうなったのだと。
「おーい、大丈夫か？」
高く、澄んだ声。
翔が振り返ると、白くて目が赤い小さな少女が居た。背が翔の胸くらいまでしかない、
「すみません、どなたでしょう？」

言って、ついじろじろと見てしまう。外套から覗く少女の格好は、黒光りするベルトを鎖で繋げ、体の要所に貼り付けただけのものだった。翔はつい呟く。
「とても……ＨＥＮＴＡＩです……」
「ん？」
「いや、なんでもない」
「おい、体調が悪いなら今日は落ちるか？」
「えっ？」
「ん？」
「えっ？
「え？」
「お前まさか……、哲か？」
「何言ってんだ？　そうに決まってるじゃねえか」
「ちょっと待ってくれ、時間をくれ、十秒くれ、カウントしろ」
「何か分からんが、分かった」
いーち、にー、さーん。翔の目の前で小さい女の子が首輪と鎖でベルトプラスガーターで、八重歯を除かせながら数を数えている。ありのままに考えてみたが訳が分からなかった。
「数えたぞ。もう良いか？」
「追加で六人前頼む」
「仕方ねえな、一分だけだぞ」
翔は分かった。このノリをスルーする、こいつは哲だと。
「全て分かった。お前は哲だ」
「だからそう言ってるんだが」
翔としては、哲の変身ぶりに戸惑いを通り越して頭が爆裂したのだが、この場ではそれが功をそうした。
「お前……恥ずかしくないの？」
少女が哲と分かり、一番に気になったのはそれだった。翔だったら一生引きこもる。
「んー、ゲームだろ？　むしろ恥ずかしいのは製作者とかじゃない

のか？」
「そ、そうか」
翔は敗北を知った。
「それよりも、早く冒険しようぜ！　せっかくＶＲなんだし、戦闘とかやりたいぜ」
翔を放ってうろうろする哲を止め、まずどんなキャラクタークリエイトをしたか、それの確認を提案した。選択した種族、職業によってしなければならない事、した方が良い事、戦闘スタイルなど、あらゆる事が変わるのだ。
「それで、種族名と職業は？」
「さあ？」
「どう言う事なの……？」
「俺、決めてないぞ。何にも」
「そんな訳有るか！」
「本当だって。隠しコンテンツ？　あれの設定して気が付いたらここに居たよ」
翔は隠しコンテンツの事にやっと気が付いた。性別が代わり、それに驚いていてすっかり忘れていたのだ。
「マジでどう言う事なの……？」
不可解だった。設定も何も無くキャラクターが決められるなど、聞いた事が無い。仮に隠しコンテンツでの特別ルールだとしても、強制ゲームスタート、そんな事が有るとは思えなかった。コンテンツスタートの表示すら覚えが無い。翔の不安は増大していった。
「……、とりあえずメニューを開いて確認してみて。メニューって声を出すか、ちょっと強く思えば出てくるから」
「分かった。メニュー！」
「呟くだけで良いからね！」
「出たぞ。やべえ、面白いな。頭の中で項目が並んでるよ。すげえ」
「分かった、オーケー、落ち着け。その中のステータスって項目があるから、メニューを呼び出した方法で選んで」

「ステータス！」
「だから呟けって！」
「ええと、種族がヴァンパイアロード」
ヴァンパイアは、吸血して体力を回復したり能力を増大させたり出来るが、夜以外だと能力が著しく制限される、特殊系の種族だった。だが、ヴァンパイアロードなる種族は翔は知らなかった。
「ヴァンパイアロード？　今度のアップデートで使うやつの先行配信とかそんなのか？　それで？　職業は？」
「職業は、オールフリーだって」
「意味が分からん！　そんな職業初めて聞いたわ！」
エノト・オンラインに職業は数あれど、オールフリーなどと言う職業は全く聞いた事がなかった。
「むしろ職業なのか？」
「さあ？」

テツのスキル

翔は、とても嫌な予感がした。
　急いでメニューを開き、回転する記号群を呼び出しステータスを選択する。
「こっちの種族はハイエルフ。職業は……、職業はジャスティスオブザワン」
　何ゲーなんだよ、そう翔はへこんだ。膝を柔らかな草原に落として、うなだれ、口走る。
「俺のジャスティスは……どこなんだ……？」
「何か格好良いな」
　膝裏まである毛先を揺らせ、しゃがみこむ哲が翔の金髪を撫でる。少ない雲がゆったりと流れる青空の下、草原を通る風が翔のスカートを荒らす時、沸いて出た疑問が口から出た。
「何で撫でてんの？」
「ん？　気持ち良いから。何かさらさらしてんだぜ」
「自分の髪でも撫でてなさい。お兄さんは忙しいんだ。いや、お姉さんか……。なあ、お前は小さい女の子だけど、そっちから見て俺はどう映ってる？」
　撫でるのを止めた哲が、翔の顔を覗き込んでうなりだした。
「一言で済ますと、外国人の歳なんぞ分からん」
「ですよねー。お前に聞いた俺が末期だった。ローかハイかミドルかくらい分かれ」
　翔は、自身の容姿については棚上げし、情報収集と言う、問題解決のための基本的なアプローチから始めた。早くしないと何時まで経っても動く事が出来ない。メニューを開いて、片っ端から知らなければならない事を吸収して行く。もちろん哲から目を離さない。哲は何かに興味を持つと、回りが見えなくなる人間なのだ。哲は暇なのか、蝶を追いかけている、哲と同じサイズの蝶を。

「おいぃ！　何やってんの！　そんなもの追いかけちゃ行けません！　やばい奴だったらどうすんの！？」
「すげえぜ、こいつ。口のストローが三本ある。うねうね動いてるよ」
「きもいから！　絶対敵だから！　戻ってきなさい！」
哲は蝶から離れると、しょんぼり顔で翔の隣に座った。翔は腕で額をぬぐって。
「だめだコイツ……早く何とかしないと」
その後、調べる速度を上げた翔に悪いニュースと、良いニュースが舞い込んだ。
良いニュースは、複数のスキルを発見した事だ。種族が持っているスキルと、職業が持つスキルの二つ。
「こっちはやっぱり魔法系だな。恐らくエルフの上位互換。パッシブとアクティブがエルフのそれだし、さらに追加されている」
「とりあえず何を言ってるのか分からん」
パッシブとは、取得した時点で効果を発揮するスキルの事で、能力値の上昇、状態異常防止など、キャラクターのステータスに関係するものが多い。アクティブは、プレイヤーの意思で使うスキルで、キャラクターの多彩な行動をさらに広げるものだ。
翔は、哲にスキルを説明した後、現在覚えているのは何なのか確認させた。
「なあ、これってどう使うんだ？　なあ？」
翔はスカートを引っ張る哲をなだめると。
「メニューを開いた感覚を思い出せ。ただ声は要らん。第六感を使え」
そう言った瞬間、哲が黒い煙を残して消えた。
「なん……だと……？」
翔は周りを見渡すがどこにも哲は居ない。
「哲、哲！」
「ん？　どうした？」

後ろに哲は居た。びびった翔が哲を問い詰めると、その形相にびびった哲が説明を始めた。
「アクティブスキルで、ミストってのが有ったんだよ。効果は霧になるのと、短距離の瞬間移動。驚かせて悪かったな」
「直感と野生の缶と空き缶で動くのはやめて下さい！　ゴミ箱に捨てれ！」
翔は自分が何を言っているのか分からなかったが、哲がおろおろと困ってるのを見て冷静さを取り戻す。咳を一つついて次に進めた。
「次は、これ」
哲の黒い爪が一メートルほど伸びる。翔が驚いているのを完全に無視し、鋭く尖った爪で草刈を始めた。切れ味を落とすこと無く刈って行く。美しい草原に不釣合いなハゲが出来た。
「それ何？」
「んー、サイクロンだって。爪が伸びる」
「ヴァンパイアの能力じゃないな。ヴァンパイアロード特有の能力か」
哲が草刈に夢中になってしまったので、翔は悪いニュースについて考えた。運営と連絡が取れないのだ。嫌な予感は膨らむ一方だった。これでもしログアウトが出来なければ？　翔は最悪の想像をとりあえず放置した。仮にそうだとしても、楽しんでる哲の邪魔はしたくない。翔が誘ったのだし、水を差すにはまだまだ早い。メンテナンスやゲームに重大な支障があるなら、今頃家で目覚めているはずだった。ゲームの処理上でもそうで、ゲームの中に居ると言う事は、ゲームの処理が行われ続けていると言う事。そもそも隠しコンテンツは運営のイベントのはずだ。プレイヤーの好きに辞められないなら、ただの誘拐ではないか。
しかし本当は分かっていた。ログアウトをしないのは勇気が足りないだけなのだと。
「なあ、もう良いだろ？　冒険しようぜ」
翔の思考を砕いたのは哲の言葉だった。白く幼い顔立ちに、期待

に満ちた赤い目。その姿に毒を抜かれた翔は、うなずいて歩き出した。とりあえず前へ。

テコテル街と変質者

翔は三歩歩いて二歩下がった。とりあえず歩いたものの現在地が分からなかったのだ。
「どうしたんだ？」
哲が、伸びた爪を振り回しながら振り返る。
「いや……現在地が分からなくて。ここってどこなんだ？　つーか危ないから止めなさい」
翔は少し不満そうな哲を黙らせると、記憶を掘り返しながら考えた。草原から見える景色からでは全く判別が付かない。街道を探して町に行くべきだ。そのために迷子防止用の魔法を置いて行こうと。
「よし、とりあえず街道を探そう。道に出れば町に着ける」
「分かった」
哲が消えた。一瞬置いて少し離れた所に出現する。
「待てい！　どこ行くの！？　方角分かんの？」
哲が声を上げた。
「あれだ！　右！」
翔は悲しい思いに襲われた。哲の前まで歩くと、小さく細い両肩に手を置いた。
「哲……北ってどっちだ？」
哲はニコッと笑うと。
「多分あっち！」
翔は哲が指差した方角を見ると、遠く離れた場所にうっすらと木々が見えた。森だ。空には灰色の小さな雲が徐々に動いている。
「明らか死亡フラグじゃねえか！　そっち行ったら森で迷って雨に打たれているところを敵にやられるんですね分かります。しかも右って何だ、右って。せめて東って言え！　しかも多分って、完璧分かってねえじゃねえか！」
哲は困難な事に燃えるタイプで、ＲＰＧで難易度があると迷わず

ハードを選択する人間だった。翔はノーマル。イージーを選択すると、何故か負けた気がするのだ。
哲に思う存分突っ込んだ後、翔はさっさと魔法を使った。周りに都合の良い物が無いので、信号を発する魔法を一から作る。おにぎりを作る様に、角度をつけた手のひらを交互に重ね、吐息を吹き込む。青い光が漏れ出した手を開けると、尖り透き通った石が出現していた。中心から青く発光している。その石を地面に突き刺すと、翔と石の位置関係がすうっと理解出来る様になった。
「すげえ。翔、格好良い」
翔は少し照れくさかったので、「これが魔法だ」と大仰に言っておいた。哲が置いた場所をいじる前に、さっさと移動する。
「そうだな……、森を迂回するルートを取ろうか。いくつか森の近くに有る町を知っているし、目印は有った方が良い。何か有ってもこの場所に戻ってこれるから、気を楽に行こう」
目的が決まれば後は単純だった、歩くだけ。翔の周りで消えたり走ったり、はしゃぐ哲に微笑ましさを感じながら、風とゆれる草の音と、暖かな日差しを体に受けてゆっくりと進んだ。
森から離れた場所を歩いていて、それを見つけたのは哲が先だった。
二人から離れた場所に、動く何かが見えたのだ。翔は警戒したが、時間が経つと正体が分かった。馬車だ。馬車が有ると言う事は、そこは街道が通っている可能性が高い。それでなくとも、人が通ると言う意味が分からない二人では無い。
「キター！」
「良し！　最初の冒険はクリアだな」
何て事の無い冒険だったが、翔にとっては仲の良い友人とプレイしている事が、すでに高揚感をくすぐるのであり、はしゃいでいる哲の様子が、自身が失ってしまったゲームの楽しさを甦らせた。ふっと、眩しき思い出と今が重なる。ゲームを始めて買ってもらったあの頃と。

「翔、行くぞ。……どうした？」
哲が翔の顔を覗き込んだが、翔は笑って「何でもねーよ」と言って歩き出した。町にはもうすぐ着く。そんな予感を翔は感じ取った。

「わいせつ物ちんれつ罪でタイーホする」
衛兵の最初の台詞がそれだった。間違いなく二人に言ったのだ。翔は問い返すと同時に、新しいイベントフラグなのかと疑問に思った。こんなイベントはまだ存在していない。
「そんな短いスカートをはいて、肩を出してほとんど裸ではないか。べ、別にときめいたりなんてしてないからな！」
「なにやだキモい」
無精ひげを生やした鎧姿のおっさんが、顔を赤くしながらそんな事を言うので、翔は本音をこぼしてしまった。後悔はまったく無い。翔に言わせればこうだ、お前がタイーホされろ、今時ツンデレかよ。哲は何が何だか分からない顔をしていた。
「これしか服は持ってないのですが」
翔が服を摘むとなにを考えたのか、衛兵の鼻から何かがトロリとたれた。血である。
衛兵は荒い息をつきはじめ、槍を構えた。
「大人しくしろ……。大丈夫、詰め所でちょっと検査をするだけだ」
衛兵の目が血走っている。翔が、どうすれば良いのか必死に考えている時、哲が前に出た。翔がどうした？　と声をかけると。
「なるほどな……、分かった」
哲の片手が外套にかかり、引かれた。
音をたてて宙を舞う外套。風に弄ばれたそれは、無数のこうもりに分かれて消え去る。
残ったのは、体の要所をベルトで覆った哲の姿だった。交差させた腕を開いて爪を伸ばす。
「待て、止めれ、事態を悪化させるな。しかも何が分かった」

冷や汗をかいた翔が哲を止める。だが、この場は哲と、槍を構える衛兵を中心に回っていた。静かに沈黙する二人。
「おい、なんでだよ。なんのシーンなんだ、要らねえだろ」
翔の言葉なんかでは、二人は止まらなかった。高まる緊張、衛兵の荒い息。
すると、二人の間に鳥が舞い降りた。鳥は二人を交互に見る。
突如の一声。鳥が鳴いたのだ。深く腰を落とす哲、吼える衛兵。
「うおおおおおおおおばばばばばば」
衛兵は、鼻血を噴出して、倒れた。
悲しい戦いだった。奇しくもその勝者として立っていられた哲の顔には、喜びは浮かばず、ただただ苦く歪むだけだった。
「翔、この人大丈夫？」
「おかしいだろ！　なに二人の世界に入ってんの！？　あの鳥はなんだったんだよ！　しかもどこ言ったあいつ！　なんのジャッジだったんだ！？」
その時である。
「隊長！」
二人が声の方を見ると、歳若い鎧姿があった。鎧姿は体を震わせると、息を吸い込んで。
「隊長がやられた！　曲者だ！　だれか、応援を呼んでくれ！」
翔は大事になったと理解した。

脱出不可能

しかしそれは、呼ばれた応援に囲まれた事ではない。噴出した血。翔はため息をついた、深く、深く。予想以上の事態だったが、うすうす感づいていればショックは小さい。取り乱したりする事は無かった。腹が重く締め付けるだけで。

「哲、良く聞いてくれ」

「どうした？」

六人の鎧姿の口に上る、短過ぎるスカート、ほとんど裸、痴女、変質者、犯罪、女神をバックに、翔は爪を戻していた哲にささやいた。

「ログアウトしてくれ」

「これから面白くなるんじゃないのか？　チュートリアル戦闘だろ、これ？」

いつも声量の変わらない哲に翔は、さっきそれが分かったのかと声を上げそうになったが、どうにか押さえ込んだ。自身の軟弱さを哲でまかなおうとしているのだ、突っ込んでる場合では無い。

「大丈夫だ、運が悪ければここを出れない。……どうもおかしいから確かめたいんだ」

何が大丈夫なのか言ってて分からない。出来なければどうすれば良いのかも。ただ、ここは翔の知るエノトでは無い。さきほどの衛兵は無数にあるイベントかもしれないが、噴出する血は、現在のＶＲゲームの大原則、過度な血や残虐描写はしてはならない、に接触するし、そもそもエノトには、垂れる鼻血や擦り傷切り傷程度の表現は有っても、噴出すレベルは無かった。他のＶＲゲームも同等かそれ以下である。それがぎりぎりなのだ。

「ログアウト出来ないな。バグか何かか？」

哲の声に翔は反応できなかった、ある種の希望が絶たれたからで有るのと、閃いた事が有ったからである。今、この場が、翔の知る

エノトと違う事を断定する手段だ。ただ結果はどうあれ、鎧姿に囲まれたこの場でする勇気は無かった。
「哲、後で説明するからこの場を何とかするぞ」
困惑顔の哲が頷く。翔は詰め所に行くのは良いが、どう対応されるか分からないので、鎧姿達に疑問を率直にぶつけた。
「私達が詰め所に行ったらどうなりますか？」
翔の言葉に三人の顔が赤くなり、二人は息を大きく乱したが、一人は平然としていた。その反応を見て、詰め所に連行される考えが消える。
「哲、今からチュートリアルを開始するぞ。退却戦だ」
「レベル高いな。良いぜ、ワクワクして来た」
そんなチュートリアルは無い。詰め所に連行されるのが、次のイベントへ進むためのフラグ、進行条件かもしれないと思ったが、そんな事は何時でも出来る。まずは確かめるのが先だった。
「あの時、指を指してた森が有っただろ？　あそこに逃げ込むんだ。俺が魔法で衛兵たちを妨害するから、哲は自分か俺に近づいた奴を無力化してくれ」
「分かった」
「絶対殺すなよ」
「おう」
衛兵達は槍を構えて、動くな、と再度警告している。先ほどから何回もしていたのだが、二人は無視していた。それどころでは無い。翔は近くに有った小石をいくつか拾った。警告する衛兵達に、呼び出した外套をはおる哲。翔は小石を握り締める、石が青く発光し始めた。魔術師だ、と声を上げる衛兵達。
小石を投げた。弧を描いたスローボールに、衛兵達は道を譲った。が、
瞬時に速度を上げ、曲がり、小石は若い鎧姿に当たった。光が強まり、鎧姿は体を何度も跳ね上げる。
二人は走り出した。

我に返った衛兵達は直ちに後を追う、わだちのついた街道を走る二人と衛兵達。接戦になるかと思いきや、みるみるうちに二人は衛兵を引き離した。
「ん？　何かあいつら遅いな」
「槍と鎧だよ。俺達はそもそも重い物は持ってないし」
翔も今気づいたのだが、そんな事知っていましたが、なにか？と言わんばかりの態度だった。
しばらく走っていると森が見え、速度を落とさず中に入る。通ってきた道を確認したが、衛兵達は追ってはこない。これ幸いと奥に進み、泉をたたえる小さな広場で二人は止まった。二人の息は乱れない。
「おー、体力上がってる。良いなこれ、動き放題だ」
「ちょい待て、どこかに行こうとするな。確かめたい事がある」
先にある森の続きに入ろうとした哲を止めると、翔はのどを鳴らして目を瞑った。呼吸を繰り返す。一つ吸う度、頭を過ぎる不安。いくつもの異常点。覚えの無いログイン、噴出する鼻血、出来ないログアウト、そして謎のコンテンツ。これらが意味するものは？
白いブラウスのボタンを、上から外していく。ここが翔の知っているエノトなら絶対に出来ない事。外気を感じる。悟り。
翔は目を開けた。
そこには張りの有る、大きな乳房があった。
ここは翔の知っているエノトではない。十六歳から出来るＶＲＭＭＯでは性的表現は不可能。そんなことをすれば、直ちに会社は猛抗議を受け損害を受けるだろう。社会が許さないのだ。そして、コンテンツによって導かれた。推測としては。
「哲……もしかすると、俺達はクラッカーの改造データによる改変を受けたかもしれない」
翔の推測は、ゲーム処理会社が何者かの介入によってデータ改ざんを行われ、ゲームが異常を来たしているだった。
「どう言う事だ？」

哲の当たり前の質問だった。翔はＶＲＭＭＯでやってはならない事の説明を交えながら、感じた不安を説明した。
「だがゲームをする前、このゲームは、セキュリティがありえないほど固いって言ってなかったか？　良く分からないが、そんなに簡単に改造なんて出来るのか？」
問題はそこであった。処理会社に干渉してゲームを改ざんするのは、よほど難しいはずで、しかし絶対に出来ない訳ではない。非常に高い技術、ツールを持った個人または複数など、世界中を探せばどこにでも居るのだ。
「分からないけど、出来る奴には出来ると思う。する意味が分からないけど。ただ、ゲームに入って出れない俺達にはどうしようもないって事は分かる」
する意味、それが不明であった。金目的なら大々的に犯罪行為をする理由が分からない。下手をすると人命に関わるのではないか？
翔の頭に疑問が過ぎった。
いや、それは無かった。プレイヤーには四六時中ログインしている者も居るのだ。知り合いにも何人か居る翔は、その可能性は無いだろうと結論付けた。だとすると。
額に浮く脂汗、それを拭って息を吐き、魔法で風の歯を作った。
「どうした？　何をしようとしてる？」
哲が心配している。だが知らなければいけない事だった。どこまでデータを改ざんされたのか分からないが、もし、痛みもリアルになっていたら？　怪我の具合しだいでは本当に。
翔は自身の腕に、歯を打ち込んだ。
食い込む風、徐々に浮き出す血、あまり痛みは感じない。出力を上げる。大きくなる歯、血があふれ出す。
痛みにうなりだす翔は、大きく手を振った。長い金髪を揺らし、風は居なくなる。膝から草の上に落ちると、肩を上下させ荒い息を繰り返した。
結論はこうだ。痛みは軽減されているが、ゲームよりはっきり

している。強ければショック死するのではと危惧するくらいに。
「馬鹿野郎！」
今まで変化の無かった哲が声を張り上げた。翔の横に瞬間移動し体を支える。
「大丈夫か？　何を考えてる！　危ないだろうが」
どうすれば良い？　慌て気味にたずねる哲に、翔は手のひらを向けた。大丈夫の合図だった。そのまま手のひらを血のあふれる傷口に当て、横にスライドさせた。
残ったのは、染み一つ無い白い肌と、あふれていた血の跡だけだった。翔は息を整え立ち上がる。
「すまん、大丈夫だ。傷は魔法で直した」
よろける翔を哲の手が抑える。
「この馬鹿が、大丈夫じゃねえじゃねえか。とりあえず休んでろ」
哲は翔をゆっくり座らせると、立ち上がって「周りを見てくる」と言って消え去った。翔には哲を止める暇も無かった。
回復魔法は難しい。細かな制御が必要な魔法で、要求される技術は中級者であってもなかなか出来ない。翔は上級者の仲間に訓練されたから出来るのだ。
翔は考える。これからどうすれば良いのかを。もし本当にデータ改ざんだとすれば、あのコンテンツが偽物だとすれば、死の可能性があるならば。運営が、警察が解決するのを待つしか無い。あの時、軽い気持ちでコンテンツを設定させるべきでは無かったのだ。哲に申し訳なかった。初めてのＶＲがこんな事になってしまって。
ただ不思議だった。ゲームに閉じ込めて死の危険も有るにしては、二人のキャラクターが強力すぎるのだ。恐らくのヴァンパイアとエルフの上位互換、その王。簡単に生きていけると言わんばかりだった。まるで二人に冒険を続けろと、それが必要なのだと言わんばかりに。

テコテル街のギルドに、一つの依頼書が貼り付けられた。近くの森に逃げた変質者の捕獲。依頼主は大地の槍団長ヘルズ・モーゲル。翔がきもいと評した、あのツンデレである。

変質者と変質者と変質者

鉛色の空が翔の不安を表していた。短い草花や泉は薄暗くなり、遠巻きに立っている木々は生気を失って、幽霊の様に翔をうかがっている。這い寄る冷気に吹きすさぶ風、現れるいなびかり。雨。それらは段々と強まり、翔の髪を荒らし、白いブラウスを透けさせ、まだ完熟したとは言い難い、女の線を、そこに浮かび上がらせていた。

哲はまだ戻らない。

視界の端に影が見えた。哲かと視線を向けると、大きさに人違いと気づく。まさか衛兵が追ってきたのか？　そう考えた。影は薄暗い木々の間から、鉄でも千切りそうな筋肉あふれる腕と、素材の分からない、ざらついた灰色の腰巻を雨の中にさらし始め。続いて何も通さない、見るものを萎縮させる体と、大きさも力強さも変わらない大剣を背負って、広場に侵入を果たした。翔は大男の顔を見て二度目の衝撃を受ける。

その顔はおっさんだった。

横は髪が有るのに上は薄く、前はほぼ無い。しょぼく覇気の無い顔。鼻の横から口の両端まで駆けるしわが、おっさん顔をさらにおっさんたらしめている。多分生きるのが辛い。

顔と首以下に、異常にギャップを持つ男は、まだ少し力の出ない翔の前まで行くと、低く厳かな声を出した。

「貴様、神か？」

翔は、は？　と気の抜けた声を出してしまった。意味不明である。男は続ける。

「我が主と並ぶその萌え姿、つい信仰してしまいそうだ」

翔は悟った、こいつマジやばいと。同時に男の出身について予測が付く。

「あなたはまさか、フジの？」

東の国、フジ。その国を一言で言えば、独裁者と狂信者の国。王は神であり民衆は信仰すべきが公式の一言で、発表当時、ネットでは公式が病気になったと、何かにつけ話の種にされていた。だが、王のキャラクターが公開されると話は一変。千年前から続く、女王である少女アマテラと、身分を持たないサムライとの恋愛シナリオも相まって、ネット上でも狂信者が続出している。

「しかし、我が信仰は主のために」

男は翔の質問を軽く聞き流した。むしろ聞く気があるのか疑わしい。翔は言葉を重ねるが男は答えず、背負った大剣をおろして抜き、地面に刃先を落とした。鈍い音と共に、雨に打たれる黒い刀身は地面に沈む。

「萌えは主のために。我の心を揺さぶった責を受けてもらおう」

話が通じない。男は自身の頭の上で大剣を構えた。獲物を叩き潰す大剣の圧倒的な存在感、使い込まれた男の体、振り下ろす事だけを考えた目つき。翔は動けなかった。辺りの薄暗さが精神を、叩きつける雨が体力を奪っていく。一瞬、大剣を見つめる視界がさらに暗くなった。だが雨はその勢いを失っていく。なぜ？　男の体がふらついた。翔を狙っていた大剣が狙いを狂わせ、男の横を砕く。飛び散る土。翔は短い時の中で気が付いた。黒光りする靴が、足が、男の喉が有った場所で浮いている。黒い煙から膝が見え、太もも、白い肌になり、ガーターが、揺らめく外套が、張り付いたベルトが姿を現して一人の少女になった。

ひるがえって四つんばいで着地。男の体は止まる。翔は見ていた。赤い目を怒りにぎらつかせながら立ち上がる。彼女は言った。

「おい、翔に何をしようとしてた？」

爪を伸ばす。男は体勢を戻してまた構えた。

「なあ、てめえは翔に何をしようとしてたんだよ」

男が静かに低い声で言う。

「この剣は我がいち物、我が欲」

初心者用運動サポート起動。そう呟いて吐き捨てた。

「叩きのめす」
哲は消えた。

恐れる者

男の体がよろめく、後ろ、横、下。持ち直した大剣が風と雨を切るがそれだけだった。哲が消えては蹴っているのだ、喉とあごとうなじを何度も何度も。それでも男は沈まず、即座に立ち上がっては剣を振るっている。巻き込まれた木々はなぎ倒され、あるいはへし折られ、一撃の圧力は雨をともなった突風となって、草と土を巻き込みながら翔の体を貫いていく。翔は腕で顔を守りながら二人の戦いを見ていた。見る事しか出来なかった。

爪を使わない哲が煙となり消え、男の頭上に現れた。何度も繰り返した移動だ、男は大剣を振りながら一瞬前に居た場所を見ており、剣には雨が叩きつけられている。哲は蹴りの体勢に入っていて、その無防備な首筋に足が吸い込まれようかという一瞬、さきほど消えた時間を考慮すれば二瞬に、哲の体は大剣によって引き裂かれた。

尋常な速度ではない。男は振った大剣をそのままに、体を回転させ頭上へ回し、哲の体に叩きつけたのだ。さらに速度を速めて。ここでの意味は、哲の出現場所が読まれたと言う事。何度も何度も瞬間移動しているせいで、攻撃するポイントがはっきりしてきている、こう言う事であった。それと共に、哲が爪を使えない事、使いたがっていない事、蹴りでは確定的なダメージを与えられない事、それらがこの時、全員に伝わった。パッシブスキル、カウンターミストによって自動で煙になった哲を含めて。

叩きつける雨であっても哲の熱を抑える事は出来ない。だが、その指先には迷いが有った。それはだれでも気づく事が出来る。もちろん翔だって気がついた。体はもう動くのだ、立ち上がらなければいけない。まっすぐな哲を何時も通りまっすぐにしてやるのだ。翔は立ち上がった。

「哲！」

意思のこもった大声に、向かい合った大小は振り向きもしなかっ

た。振り向けばどちらかの足が、向こうに届く。
「お前は余計な事を考えるな！　後の事は後で考えろ！」
雨は降っていた。
「一緒にだ！　お前だって分かっているだろ！」
翔の言葉が終わった時、男の真正面に移動した哲が大きく吼えて、指に生えた剣を男の喉に突き刺した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7208w/

エノト・オンライン

2012年1月12日01時56分発行